

11/10 20:20

公開不可

取扱い注意

情報共有 (3枚 非管理メモ)

暫定版

NISA班 ← プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成23年11月10日(木) 11:00~11:40

場所：東京電力本館3階大会議室

先方：記者約15名(カメラ3台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所2号機原子炉格納容器ガス管理システムの気体サンプリング結果について
- ・ 福島第一原子力発電所4号機原子炉建屋内における空調ダストの損傷状況等の調査について
- ・ 柏崎刈羽原子力発電所における津波対策の取り組み状況について
- ・ 新潟県沿岸における津波堆積物調査の実施について

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

- Q. 4号機の空調ダクトの損傷状況の調査について、今回は再確認調査という位置づけなのか。
- A. 4号機については他号機に比べて線量が低いので、建屋内での調査は可能な状況であった。今回は改めて爆発の状況を確認するために、原子炉建屋3~5階の空調ダクトを中心に調査を実施した。
- Q. 前回調査からの進展はどうか。
- A. 前回調査でのSGTSフィルターの下流に放射性物質が付着していたことや、今回調査のダクトの損傷具合からすると、3号機から水素が回り込んだ可能性がより高まったと思われる。前回調査よりも証拠とデータは揃いつつあると思う。
- Q. 着火源の特定はどうか。
- A. 着火源についてはまだ特定できていないが、静電気や余震による金属摩擦で発生する火花などが考えられる。
- Q. 4号機の外壁損傷の原因についてはどうか。
- A. 爆発による状況について全て確認できていないが、おそらく4階で発生した爆発によって3階の外壁も損傷したものと思われる。

Q. 2号機のガスサンプリング測定の結果においてキセノンの濃度が、以前 10^0 オーダーだったものが 10^2 オーダーになっている。評価結果については、希ガスの補足率が重要とのことだが、どのように理解すればよいのか。

A. ガスバリアブル瓶で生ガスを直接サンプリングして、ゲルマニウム半導体で判定しているが、サンプルが薄いために検出限界値が高くなる。そのため、何度か繰り返しチャコールを通して、キセノンなどを付着することを考えている。先週も同様な測定を行っているが、クリプトン85が 2.8×10^0 Bq/cm³ である。一方、生ガスでは 8.8×10^1 Bq/cm³ である。この値を比較するとどのくらい補足しているかがわかる。今回、キセノン135で 1.9×10^0 Bq/cm³ が測定されているが、捕捉率で割り戻すと 1.1×10^1 Bq/cm³ となる。見かけ上数値が1000倍近く上がっていると思われるが、換算すると入り口付近で同じなる。前回の結果も捕捉率を用いて換算すると 10^2 Bq/cm³ ぐらいのため、元のところでどのぐらいのレベルかを表しているもの。

Q. 福島第一原子力発電所作業員の年間被ばく線量の限度数値が250mSvから100mSvに引き下げるになるとのことだが事実関係は。

A. 厚労省から省令改正があり、新たに緊急作業に従事する作業員は、年間100mSvに限度値が変更になっている。

Q. 線量限度値が引き下げられた背景はなにか。

A. 事故の収束により、発電所内の放射線量が低くなったため、このような見直しが行われたと考えている。

以上